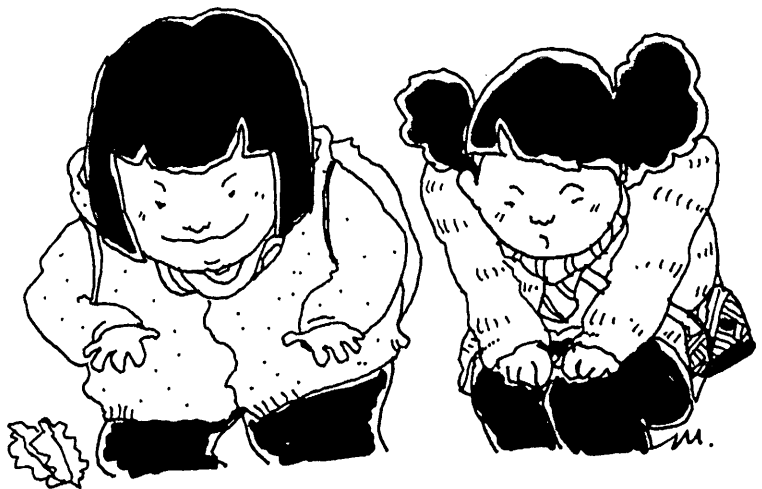


# 02 | 人として生きるための 2019 根っこを育てる

～乳幼児期の教育



特集／実践① ●富岡美織  
泥・水・砂あそびから子どもたちが得るもの……………26

特集／実践② ●吉田真司  
ともやさんに寄り添って……………36

特集／コラム①／共に子どもを理解する大人として ●岩橋 由……………44

特集／コラム②／何でも食べられる子に～実践ととも学びだこと ●小山実佳……………46

特集／コラム③／「体づくり」と「表現する力・伝える力」が自立の基礎となる ●山田隆幸……………48

特集／論文 ●望月 彰

子どもの権利から見た新要領・指針——これからの乳幼児教育の課題……………50

特集／近年の日生連乳幼児期の教育分科会のあゆみ ●中河原良子

「生活教育通信」まとめから……………58

研究部／ともにつくる生活教育の実践 ●吉野裕之

子どもの好奇心と、学びのエネルギー……………66

——小五「理科」と小一「生活科」がにつながる……………66

研究部「コメント」 ●加藤聡一  
今までの子どもの経験を活かす——学びの芽、生きる根っこを知る……………76

本文カット ●水戸香恵 デザイン・制作 ●みといすみ

誕生から八歳（小学校低学年）までの乳幼児期は、体も心も驚くほどの早さで成長・発達します。人として生きていく根っこを育てるとても大切な時期です。

この時期に、身近な自然や豊かな文化活動に触れ、自分の好きなことに夢中になることは、その子らしさを体や心に貯めていくことだといえます。また、仲間の中で活動し、その子らしさが発揮される表現は、主体的に生きるための芽だといえます。乳幼児期の感動体験は、生きる力の元肥・根っことなるのではないのでしょうか。

改訂幼稚園要領や保育指針では、「就学前までに身につけたい10の姿」などを示し、保育園や幼稚園が学校の準備期間と位置づけているようです。しかし、目の前の子どもの姿から出発した豊かな子ども期を保障することこそが大切ではないでしょうか。改訂小学校学習指導要領でも、学びの自主性や自由の保障が危惧されます。

人として生きる根っこを育てる乳幼児期について、子どもを主体とした各現場の実践や論文から、学び合いたいと思います。